

授業科目名	近現代政治社会思想論	単位数	2
担当教員名	宮崎 文彦	担当形態	単独
実務内容 (実務家教員の場合)			
「学位授与の方針」との関係			
本科目は政治社会思想という専門性の高い内容を学ぶものであるが、そうした思想は、時代背景や文化を反映したものであり、特定の人物の頭の中で生み出されたものではない。本科目では、様々な思想を学ぶとともに、その思想が生み出された背景にも着目する。そのことを通して、専門知にとどまらない、より包括的な統合知の育成、また単に思想を過去のものとして学ぶのではなく、現在の私たちにとってどのような意味を持つのか、また私たちの抱える問題・課題にいかにして活かしていくことができるのか、を考えようとするのが本科目である。			
授業の到達目標及びテーマ			
テキストとなる2冊の新書を読み通すことにより、まず、国家とは異なる「市民社会」や「大衆」の誕生など、今日のさまざまな政治・社会の諸問題とも深いつながりを持つ近現代の政治社会思想を学ぶことが第1である。それとともに、単に過去の思想を「知識」とくに「専門知」として習得するのではなく、その時代背景や文化を学ぶことを目指す。それによって、単に英語を身に着けることが目標ではないグローバルコミュニケーション専攻にふさわしい教養を身に着けるとともに、今日の私たちにとっての意義や、問題解決に役立てることができるようになることが到達目標である。			
授業の概要			
テキストである2冊の新書を読み進める形になるが、ただ読んで理解するというのではなく、①時代背景について調べてみる、②取り上げられている文献を実際に読んでみるということを取り入れてもらうことで、立体的な読書体験をしてもらい、授業の到達目標を目指す。また質疑応答などのインタラクティブな手法を積極的に活用し、受講生の理解が深まるようにする。			
授業計画			
第1回：オリエンテーションー立体的に思想史を学ぶことについて			
第2回：専門知から統合知へ（『公共哲学とは何か』第1章）			
第3回：古代から近世までの東西の古典に学ぶ（『公共哲学とは何か』第2章）			
第4回：明治維新から現代までの日本の思想から歴史を考える（『公共哲学とは何か』第3章）			
第5回：公共世界に必要とされるものは何か？（『公共哲学とは何か』第4章）			
第6回：公共哲学と関連する学問分野との関係（『公共哲学とは何か』第5章）			
第7回：「グローバルな公共哲学」とは（『公共哲学とは何か』第6章）			
第8回：思想史を学ぶ意義ならびに転換点となる1980年代（『社会思想史を学ぶ』はじめに～第1章1 一九八〇年代の社会思想とは何であったか）			
第9回：文明・科学・進歩を問い直す（『社会思想史を学ぶ』第1章2「世界史の転換と社会思想の転換」・3「近代啓蒙思想の『自然観』と『歴史観』」			
第10回：進化論と「自然と人間」の関係性（『社会思想史を学ぶ』第2章1「進化論の社会観」）			
第11回：宗教との思想の関係、根源悪の問題（『社会思想史を学ぶ』第2章2「近代啓蒙思想と宗教」			

「3 根源悪と歴史思想」)

第12回：近代国民国家の問い直し（『社会思想史を学ぶ』第3章1「コスモポリタニズム、ナショナリズム、インターナショナリズム」）

第13回：これからの時代に期待される国家と社会の関係（『社会思想史を学ぶ』第3章2「市民社会論と福祉国家論」3「超国家的な『公共価値』をどう築くか」）

第14回：多元的・多様性を重視する社会の実現に向けて（『社会思想史を学ぶ』第4章1「欧米中心的進歩史観からの脱却と相対主義の罨」）

第15回：批判的で対話的な歴史・文化理解のために（『社会思想史を学ぶ』第4章2「『解釈学的理解』とは何か」3「多元的なポスト近代の『比較』社会思想への途」

定期試験

教科書

山脇直司著『公共哲学とは何か』（2004年）

『社会思想史を学ぶ』（2009年）ともにちくま新書

『社会思想史を学ぶ』入手困難な場合は、kindle版・図書館蔵書・中古等の利用を推奨する

参考文献

山脇直司著『ヨーロッパ社会思想史』（1992年）東京大学出版会

『グローバル公共哲学―「活私開公」のヴィジョンのために』（2008年）

東京大学出版会

学生に対する評価

スクーリング評価（25%）、レポート評価（25%）、科目修得試験（50%）を総合して評価する。